

主な病害虫の写真 (写真提供 大阪府病害虫防除グループ・協友アグリ(株))

1. 発生・被害の多い水稻の病害虫

主な斑点米カメムシ類

出穂までは、畦畔、休耕田のエノコログサなどのイネ科雑草に生息。その前後に水田に侵入して、乳熟期にかけて籾を吸汁し、斑点米となり、米の品質を低下させる。高温小雨の夏に多発。

トゲシラホシカメムシ



体長 5～7mm。
肩が尖っている。



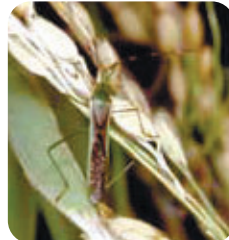
ホソハリカメムシ



体長 9～11mm。
全体に黄褐色。



クモヘリカメムシ



体長 15～17mm。



アカスジカスミカメ



体長 5～6mm。背中の
太い条、触角、脚も赤い。



イネカメムシ



体長 12～13mm。
大型で茶褐色。



カメムシ類に吸汁された斑点米



中央に吸った跡、白い円の外側に
黒い縁取りができる。

トビイロウンカ

盛夏～秋口にかけて水田で急激に増殖し、「坪枯れ」被害を引き起こす。



トビイロウンカ



坪枯れの様子

ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)の卵塊と成貝

田植後 20 日間の柔らかい苗が食害される。水深 4cm 以下の浅水では貝が活動できない。年々、発生地域が河川や水路を通じて拡大しつつある。



ジャンボタニシの卵塊



ジャンボタニシの成貝

コブノメイガの成虫と幼虫

幼虫は葉を縦に巻き、内側から薄皮を残して食害するため、多発すると葉先が一面に白くなる。
(8月中旬～9月末に多発)



コブノメイガ成虫(体長約1.5cm)



コブノメイガ幼虫(体長約1.5cm)

ツマグロヨコバイ(成虫)とイネアオムシ(幼虫)

ツマグロヨコバイが多発すると、虫の排泄物にすす病が発生して、葉が黒く汚れる。
イネアオムシは、多発すると幼虫が葉脈を残して、葉を食いつくす。

ツマグロヨコバイ(雄)



体長約5mm

ツマグロヨコバイ(雌)



体長約6mm

イネアオムシ(幼虫)



体長2～2.5cm

いもち病

葉に感染すると紡錘形の病斑ができ、症状が進むと葉が枯れる。穂に感染すると白穂になり、白穂の中の籾は充実しなくなる。気温22～26℃、多湿で日照不足の時に多発する。



葉いもちの様子



穂いもちの様子

内穎褐変病(ないえいかっぺんびょう)

籾の片側(内穎)が着色する病気で、近年発生が増加している。出穂前後に、高温で降雨があれば発生が増える。



発病した穂の様子



発病した籾の様子

2. 野菜や花で発生・被害の多い害虫

オオタバコガ

幼虫が果実内部や蕾に食入するため、防除が難しい。多くの作物を加害し、8～9月に最も被害が多い。防除対策は、被害果(蕾)を早期発見して、幼虫を捕殺する。薬剤防除は、若い幼虫の時期に行う。

オオタバコガ幼虫



体長最大約4cmに。

トマトを加害する幼虫



なすの被害果



ダイコンシンクイ(ハイマダラノメイガ)

夏～秋作のキャベツ、はくさい、ブロッコリーなどで育苗中や定植直後に被害を受けると、芯止まりや生育障害を受ける。芯や葉柄の内部に食入するため、発見や防除が遅れたり、薬剤がかかりにくい。

ダイコンシンクイ幼虫



体長最大約14mmに。

ダイコンシンクイ成虫



開張約17mm。

マメハモグリバエ

食害痕などにより、葉菜類や花き類の見栄えが悪くなり、商品価値が落ちたり、光合成能力が低下して苗物などの生育や品質が低下する。

成虫



体長約2mm。

幼虫



体長約2.5mm。



成虫が葉を吸汁したり、産卵するためにできた痕(吸汁産卵痕)
【しゅんぎく】



幼虫が葉の中を食べ進むために
できた痕(食害痕)【トマト】

ミカンキイロアザミウマ

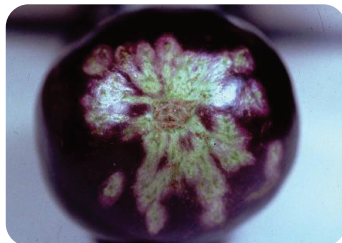
葉に寄生して吸汁するため色が抜け、葉裏は光を反射して銀色に光ったり、葉が縮れて奇形になる。果実では、表面にサメ肌状の傷ができる。

ミカンキイロアザミウマの雌成虫



体長：1.4～1.7mm。

水なすの被害



産卵痕。

きくの被害



花弁が褐色かすり状。

3. ヨトウムシ類の幼虫

ヨトウガ

若齢幼虫



頭は黒褐色、体色は淡緑。

中齢幼虫



頭は黄褐色、体色は灰黄。

老齢幼虫



体は灰黒色で約5cmにも。

ハスモンヨトウ

若齢幼虫と中齢幼虫



体は緑色から黒色までさまざま、頭のすぐ後ろに1対の黒い斑点がある。

老齢幼虫



体長4cmにも。

シロイチモジヨトウ

中齢幼虫



老齢幼虫



老齢幼虫



体は淡緑色から褐色で、老齢幼虫では体長約3cmにもなる。